

# 指導資料



鹿児島県総合教育センター

## 国語 第108号

- 小学校・特別支援学校対象 -  
平成19年5月発行

### 基礎・基本の定着を図る小学校国語科学習指導の充実

- 平成18年度「基礎・基本」定着度調査の結果を踏まえた指導法の工夫 -

鹿児島県教育委員会では平成16、17年度に引き続き、平成18年度「基礎・基本」定着度調査（以下「今回」という。）を実施した。

この調査は、学習指導要領が示す基礎的・基本的な内容のうち、「読み・書き・算」などの基礎学力について県全体の実態を把握するとともに、各学校の課題を明確にし、きめ細かな指導法の改善に資するなど、基礎・基本の確実な定着を目的としたものである。

今回も、平成16、17年度「基礎・基本」定着度調査（以下「前々回」、「前回」という。）と同様に、小学校第5学年で国語、社会、算数、理科を、中学校第1学年及び第2学年で国語、社会、数学、理科、英語について、すべての児童生徒を対象に実施した。

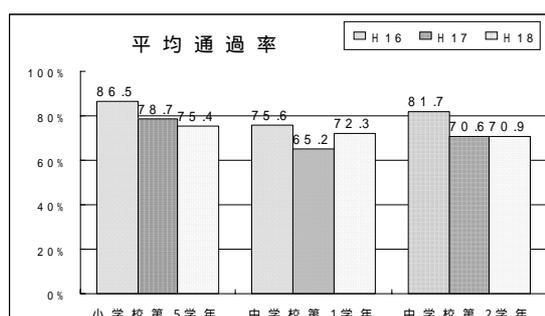
そこで、本稿では今回の国語科の結果について、前回、前々回の結果と比較しながら分析・考察するとともに、基礎・基本の確実な定着を目指す国語科学習指導法の工夫改善について述べる。

#### 1 定着度調査の結果と考察

##### (1) 結果の概要

前回と今回の各学年の平均通過率を比較すると、小学校で3.3ポイント低く

なっているのに対して、中学校では、第1学年が7.1ポイント、第2学年が0.3ポイント高くなっている。また、小、中学校の各学年で平均通過率が70%を超えた。これは、基礎・基本の定着を目指す各学校の取組の成果である。

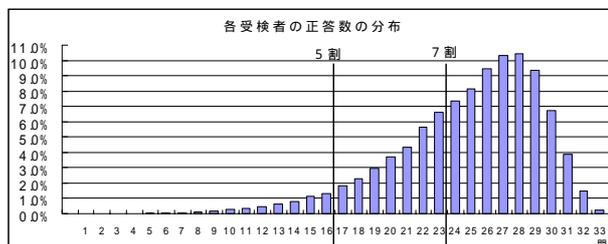


そもそも国語科の指導内容は系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的な学習を基本としている。ポイント差が前回、前々回よりも小さくなっているということは、中学校へ進学した新入生が中学校の学習指導の内容や指導法にきちんと対応できていることを示している。

今後も、より一層、指導の在り方等の工夫改善を図り、小・中・高の国語学習の系統性を重視するとともに、相互の連携を更に進め、基礎学力の定着に努めることが大切である。

(2) 各受検者の正答数の分布から（小5国語）

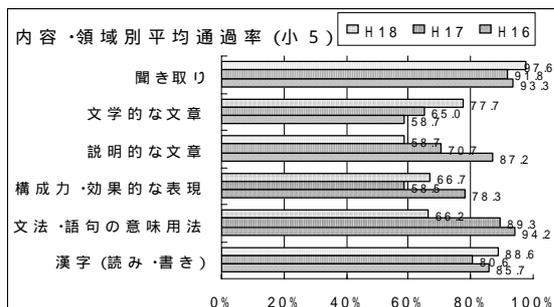
各受検者の正答数のピークが7割ラインの右側にあり、基礎・基本の定着状況としてあるべき姿になっている。しかし、正答数が7割に満たない児童が32.6%いる。これらの児童については、今後、国語に対する関心・意欲を高めながら、基礎的・基本的事項について、繰り返しの指導や個に応じたきめ細かな指導が、学校全体の取組として更に求められる。



(3) 内容・領域別の結果から

今回の結果を内容・領域別にみると、「聞き取り」、「文学的な文章」、「漢字（読み・書き）」に関する内容・領域が今回、向上した。「聞き取り」、「漢字（読み・書き）」は、おおむね高い平均通過率を維持している。また、「文学的な文章」は、前回に引き続き向上している。

しかし、「説明的な文章」、「文法・語句の意味用法」、「構成力・効果的な表現」の平均通過率が70%を下回っている。特に「説明的な文章」は12ポイント、「文法・語句の意味用法」は23.1ポイント前回より低くなっている。この二つの内容・領域は前回、前々回に引き続き低下している。



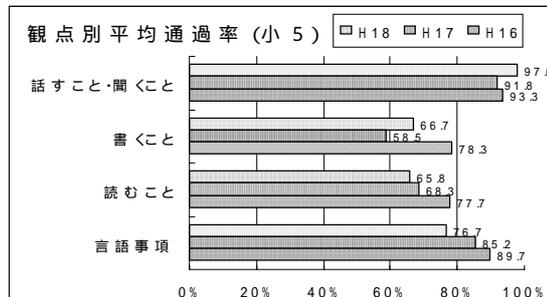
(4) 観点別の結果から

内容・領域別の結果からとらえた課題は、観点別の調査でも顕著にあらわれている。

「話すこと・聞くこと」と「書くこと」が前回より高くなっているのに対して、

「読むこと」は2.5ポイント、「言語事項」は8.5ポイント低くなっており、前回、前々回に引き続き低下している。定着の難しさが明確になっている。

これらの結果から、小学校では基礎・基本がおおむね定着しているものの、平均通過率が70%に満たない「読むこと」や「書くこと」においては、結果を踏まえた指導の工夫改善が更に求められる。



(5) 正答率の低い問題からとらえる課題

ア 3二（通過率；37.4%）

これは、第5学年及び第6学年の内容「読むこと」C(1)エ（以下C「(1)エ」と記す。）の指導事項について、筆者の述べ方の工夫について読み取る力をみる問題である。設問は、手紙のよさを伝えるために、どのような書き方の工夫をしているのかを文脈から判断し、選択するようになっている。問題文と選択肢は、次のとおりである。

【問題文】

手書きの文字で書かれた手紙には、電子メールにはない味わいがあります。書いた人らしさの表れた手書きの文字を見ると、より親しみを感じます。近ごろ、わたしの母は、知り合いの人に絵手紙を出しています。季節の花や果物などをすみでかいて色を付け、相手に応じた言葉をそえて送るのです。もらった人にも喜ばれているようです。

【選択肢】

電子メールの悪い点を述べることで、手紙の良さを強調している。

具体例をあげて、手紙の良さを強調している。

自分の体験をあげて、手紙の良さを強調している。

これまでのことを短く整理して、手紙の良さを強調している。

正解は、である。通過率が37.4%と低いのは、文章の前段には手紙のよさ（筆者の意見）が、後段には母が知り合いに絵手紙を出して、もらった人に喜ばれていること（事実）が具体的に書かれていることを的確に読み取る力が十分でないからだと思われる。説明文の指導において、高学年では筆者の意見と事実を、叙述に即して読み取ることが重点的な指導になっており、ポイントを踏まえた指導の工夫が望まれる。

イ 3三（通過率；46.9%）

これは、C(1)イの指導事項について、文章構成や文と文との関係を読み取る力をみる問題である。

設問は、文中の空欄ア、イに当てはまる語句を、文脈から判断して適切な組み合わせを選択するようになっている。問題文と選択肢は次のとおりである。

【問題文】

手紙と比べて、電子メールでは、文章を入力したり、受信したり受信して保ぞんしたりする使い方を覚えるまでに手間がかかります。父も、メールの使い方に慣れるまでに、だいぶ時間がかかったと話していました。それに、電子メールを送ろうと思っても、相手が、けいたい電話やパソコンを使っ

ていなければ送ることができません。

ア、手紙は、電子メールに比べて、相手にとどくに時間がかかります。イ、メールのようにすぐに返事はもらえません。

【選択肢】

(ア 一方 イ だから) (ア 一方 イ しかし)

(ア しかし イ つまり) (ア だから イ すると)

アに当てはまる語句は、前の段落の内容から、話題の転換を表す接続語ということで、「一方」を選択できる。また、イについては、手紙の短所を述べた文と、その結果を述べた文をつなぐ接続語として「だから」を選び、解答はとなる。通過率が50%に満たないのは、文章構成（段落相互の関係を含む）や文と文との関係を読み取る力が不足しているものと考えらる。

説明的な文章の学習で、高学年においては要旨をとらえることが主眼となるが、そのためには、下学年の指導内容である「順序」、「要点」、「段落相互の関係」などをとらえる力を身に付けておくことが前提条件であり、その指導の徹底が求められる。

ウ 5一1（通過率；24.9%）

次の言葉と意味が反対になる言葉を□□□□の中から一つ選びましょう。

1 結果

ア 準備 イ 原因 ウ 予想 エ 計画

通過率が24.9%と低かったのは、「予想」を選んだものが多かったためである。

「結果」の反対語として、「予想」を選んだのは、授業（特に理科）の中で「結果」と「予想」をセットでよく使うことも一因と考えられる。小学生が使う辞書レベルでは結果の反対語は、原因である。すべての設問の中で、この問題の通過率が最も低い。

エ 5二1 ( 通過率 ; 28.9% )

次の文の敬語として、どれがもっとも適切でしょうか。ふさわしいものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号に をつけましょう。

1 ぼくは、毎朝、校長先生に元気な声で、

ア あいさつされます。  
 イ あいさつします。  
 ウ ごあいさつします。

敬語の中の丁寧語を問う問題であり、イが正解である。解答としてはウが多かった。このような表現も、相手に配慮していることから認められてはいるが、もっとも適切な解答としては、イということになる。

オ 5三3 ( 通過率 ; 42.8% )

次の言葉を国語辞典で探します。最初に出てくる言葉はどれでしょうか。

ア サッカー  
 イ サイクリング  
 ウ サーカス

正解はウである。誤答としては、イが多かった。選択肢の言葉では2番目の文字によって順序が決まる。したがって、2番目に直前の母音がアの長音である「サーカス」が正解である。

辞書の利用については、学習指導要領では、第3学年から指導することとなっている。中学年においては、辞書を利用して「調べる方法を理解すること」、高学年においては、辞書を利用して「調べる習慣を身に付けること」を重点的に指導し、言葉に関心をもち、言葉を大切にすることを育成することが求められる。

2 結果を踏まえた改善策

これまで述べてきた課題を解決するため

に、各内容・領域における指導をどのように工夫改善していけばよいのか、具体的な指導例を述べる。

(1) 説明的な文章の指導について

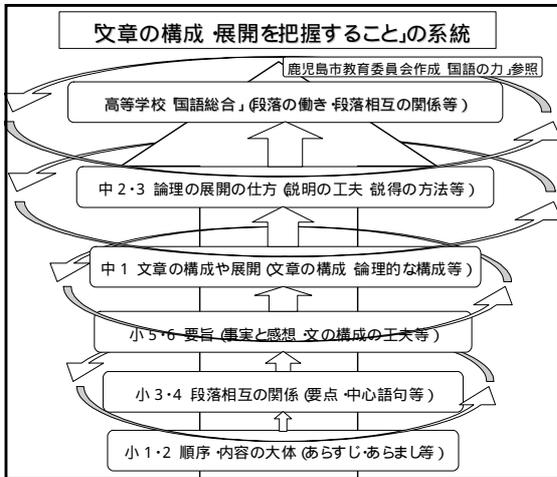
高学年の説明的な文章の指導においては、文章構成や語句の使い方、文末などの表現を手掛かりに筆者の主張や表現について吟味できるよう工夫する必要がある。そのためには、まず、中学年において説明的な文章における段落相互の関係や文と文との関係をとらえさせるために、キーワードとなる下の表のような接続語の種類と働きを理解させたい。

種類	働き	接続語
逆接	前のこととは逆の内容が、後に続く場合	しかし、けれども、だが、でも、ところが
理由	前のことからについて、理由や補いをする場合	なぜなら、だって、ただし、というのは
説明	前のことからについて、後で説明する場合	つまり、たとえば、すなわち
転換	前のことからから、話題を変える場合	では、一方、さて、ところで
添加	前のことからに、後のことからを付け加える場合	また、さらに、それから、そのうえ
順接	前の部分の内容を受けて、後に続ける場合	そして、それで、すると、そこで、だから、したがって
並列	前のことと、後のこととを同列に並べる場合	また、および、ならびに
選択	前と後のことからについてどちらかを選択する場合	それとも、または、あるいは

また、指示語の示す具体的な内容を文章の中での的確に押さえる指導も大切である。高学年では、このような指導内容を踏まえた上で、筆者の表現の工夫について読み取らせたい。

また、図1に示したような小・中・高連携の視点をもって、「文章の構成・展開を把握すること」の指導を展開することは、児童に付けるべき力がどのように螺旋的・反復的に身に付いていくのかを

指導者が知ることになり，説明的な文章における指導のポイントを押さえた学習がより可能になると考える。



## (2) 敬語の使い方を身に付ける指導

高学年における敬語学習の目的は「日常よく使われる敬語の使い方に慣れること」である。敬語の役割や必要性について意識が高まってくる時期であり，相手や場面に応じて適切な敬語が使えるような学習の場を設定することや，学校生活の場などあらゆる機会を通して，敬語が適切に使えるように意図的・計画的に指導していくことが求められる。

また，「話すこと・聞くこと」や「書くこと」の領域においても，観点として「敬語が適切に使われているか」も取り上げ，国語科学習全体の中で敬語力を高める指導を効果的・効率的に進めたい。

ところで，文化審議会から「敬語の指針」(図2)の答申が出され，「尊敬・謙譲・丁寧」の三分類から「尊敬・謙譲・謙譲(丁寧語)・丁寧語・美化語」の五つに分類し，新たな敬語の枠組が示された。今後の敬語学習においては，

この分類も念頭において指導に当たることが望まれる。

敬語の仕組み		
敬語の種類と働き		
○ 敬語は，以下の5種類に分けて考えることができる。(右欄は従来の3種類)		
	5種類	3種類
尊敬語	「いらっしゃる・おっしゃる」型 相手側又は第三者の行為・ものごと・状態などについて，その人物を立てて述べるもの。	尊敬語
謙譲語Ⅰ	「伺う・申し上げる」型 自分側から相手側又は第三者に向かう行為・ものごとなどについて，その <u>向かふ方の人物を立てて述べるもの。</u>	謙譲語
謙譲語Ⅱ(丁寧語)	「参る・申す」型 自分側の行為・ものごとなどを， <u>語を文章の相手に対して丁寧に述べるもの。</u>	謙譲語
丁寧語	「です・ます」型 語や文章の相手に対して丁寧に述べるもの。	丁寧語
美化語	「お洒・お料理」型 ものごとを美化して述べるもの。	丁寧語
従来の3種類との関係		
○ 敬語は，「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」の3種類に分けて説明されることが多い。ここでの5種類は，従来の3種類に基づいて，現在の敬語の使い方をより深く理解するために，3種類のうち，「謙譲語」を「謙譲語Ⅰ」と「謙譲語Ⅱ」に，また「丁寧語」を「丁寧語」と「美化語」に分けたものである。		

図2 文化審議会答申「敬語の指針」から

## (3) 辞書の活用を通して語彙力を高める

語彙力の育成は国語科における大きな課題である。今回の調査でも，語彙力の育成に関わる辞書活用の項目(出てくる言葉の順序)において，通過率の低下が指摘されている。

そこで，まずは，言葉に興味・関心，疑問をもつなど，言葉を大切にする指導を工夫改善したい。そのために，辞書の活用は必要不可欠である。授業の中で，分からない言葉に出会ったら辞書で調べる習慣を身に付けさせたい。習慣化とは，必要に応じて辞書を活用する態度を身に付けるということでもある。したがって，授業の中はもちろんのこと，家庭学習や生活の中においても活用が図れるようになってこそ，調べる習慣を身に付けたということになる。

その際、調べた言葉にマーカーで印を付けさせたり、付箋紙をはらせたりして目に見える形で言葉を獲得していくことが大切である。また、言葉を早く調べるゲームを授業等で取り入れることは、辞書に慣れ親しむ素地をつくる意味でも有効である。

図3 漢字・語句兼用カード

さらに、図3のようなカードに、新出漢字や難語句について調べたことを記録させ、ファイルに綴じさせ、自分のカードが増えていく喜びを味わわせることも言葉への関心を高めることにつながる。

また、図3のカードにもあるように新出漢字や難語句を使って短文作りや日記を書かせることなどを通して、理解語彙から表現語彙へと高める指導を日常的に継続したい。

要は、辞書が学習や生活に欠かせないものであるという意識と、便利なものであるという有用感をもたせることが辞書の活用に慣れ親しませるとともに、語彙力を高めしていくことにつながるのである。

(4) PISA型「読解力」を高める指導の工夫改善

国語科の学習で身に付けた言葉の力が実生活で生きて働くこととPISA型「読解力」との関連は深い。文部科学省はPISA

型「読解力」低下の結果を受けて、「読解力向上プログラムの全体像」を示し、また、「読解力向上に関する指導資料」で、具体的な実践例を紹介している。これらも参考にしながら、自校の実態を踏まえた実践に取り組むことも大切である。

また、これまでの「読むこと」の指導を工夫改善することによって、対応可能な部分もある。以下、具体的な実践例を紹介する。

ア 文学的な文章における実践例

文学的な文章教材の指導において、まず、下のような活動を一読後に、取り入れる。

登場人物がどんなことをした物語であるか一文で簡潔に書く。 ( )の中の字数は、50字以内とする。 教材名「新しい友達」(光村図書5年上) ・ わたしが( )した物語 ・ まりちゃんが( )した物語 ・ 坂本君が( )した物語 教材名「大造じいさんとガン」(光村図書5年下) ・ 大造じいさんが( )した物語 ・ 残雪が( )した物語
--

そして、単元の終末で、もう一度、同様の活動をさせる。単元の最初と最後に書いたものを比較させ、「どこがどのように変わったのか、なぜ変わったのか」を叙述を基に考察させ、その結果を話し合わせる。

このような学習のよさ(効果)は、下記の3点に集約される。

叙述(会話や行動)に即し、登場人物像を読み取ること。

物語を解釈し、短くまとめる(要約する)力がつくこと。

登場人物に視点を当てているため、物語の中心をとらえやすくなること。

このように「解釈」, 「熟考・評価」する活動や一定の分量で自分の考えをまとめさせるといった活動は, P I S A 型「読解力」を高めることにつながると考える。

### イ 説明的な文章における実践例

単元名 要旨をとらえよう  
 教材名 サクラソウとトラマルハナバチ(光村図書5年上)  
 【主な学習活動】  
 文章構成をとらえる。  
 要旨をとらえる。  
 筆者が, 教材を通して読者に考えてもらいたいことについて, 考える。

本教材は問題提起文が2か所あり, その内容・配置が変則的である。そこで, この説明文は「分かりやすいか, 分かりにくいのか」を問い, 下のような学習活動を展開する。

この説明文は, 「分かりやすいか, 分かりにくいのか」という観点で, その理由と併せて書かせる。  
 (例) この説明文は, 分かりにくい。なぜかという, 問題提起文が二つあり, 文章構成や筆者の考えがとらえにくいからである。  
 どうすれば, 分かりやすい説明文になるのか考えさせる。  
 (例) 二つの問題提起文をまとめて「トラマルハナバチがいなくなると, なぜサクラソウは絶滅してしまうのだろうか」とすればよいのではないか。  
 児童にとって, 分かりやすい説明文であるかどうかを吟味させ, 問題提起文の書き換え(リライト)をさせ, どこに問題提起文を位置付ければよい考えさせる。

このような学習活動を展開することで, 受け身的な学習から, より積極的に教材にかかわっていくという能動的な学習への転換を図ることができる。また, 「サクラソウを絶滅から守るためには, お互いにつながり合って生きている生き物たちの全体を守っていかなければならない」という筆者の考え(意図)もとらえやすくなる。

### ウ 写真を使った実践例(短時間での実践)

写真1を見せ, 児童に写真から分かること(事実), 思いや考えを書かせる。一人

一人の予想される反応としては下のようなことが考えられる。



写真1  
 総合教育センター  
 (春の風景)

事実	思いや考え
・ 桜が咲いている。 (季節は春)	・ 桜がきれいだ。 (他にも何本もありそうぞ)
・ 天体ドームがある。	・ 天体ドームで星を見たい。
・ 校舎のような建物がある。	(きれいだろなあ)
・ 広い庭があり, 緑も多い。	・ 庭で寝ころんでみたい。 (気持ちよさそう)
簡潔に書かせる(負担を考慮し, 字数はできるだけ少なく)。 低学年は写真や実物を中心に, 中・高学年は図表やグラフなど幅広く使う(発達段階や児童の実態を考慮する)。	

次に, 話し合いをさせ, 一人一人の写真を見てとらえた事実, 思いや考えを発表させる。その中で, 自分と友達の考えの違いにも気付かせることができる。

また, この活動は朝の会や帰りの会などの短い時間で実施できる。このような活動の積み重ねが, テキストを基にしっかりと事実を見る目を育て, 知識や経験と照らし合わせて自分の思いや考えをもつことにつながる。このことは, 非連続型のテキスト(写真や図表, グラフなど)を読むP I S A 型「読解力」の基盤づくりになると考える。

今後, 各学校においては結果の分析と考察を継続して積み重ね, 小・中・高連携の視点やP I S A 型「読解力」の育成も視野に入れ, 児童の意欲を喚起しながら国語力を身に付ける具体的な学習指導法の工夫改善に取り組まれることを期待したい。(教科教育研修課)